

医療安全の確保と推進

第2回

事例①利用者と家族の参画、多職種連携による取り組み

社会福祉法人いずみ会特別養護老人ホーム
リンデンバウムいずみ（秋田県秋田市）

【施設概要】施設定員：65人、要介護度：平均4.2、職員数：看護職5人、介護職29人、生活相談員2人、栄養士2人、機能訓練指導員1人、介護支援専門員1人、施設長1人、事務員5人

リンデンバウムいずみは、日々の生活支援だけでなく、看取りにも取り組み、利用者と家族の協力を得ながら、終末期も安心して過ごせる施設を目指している。

多職種の専門性発揮と利用者・家族参画

一般的に特別養護老人ホームの利用者は、入所から看取りまでの間に少しずつ身体機能が低下し、転倒・転落・誤嚥などのリスクが高まっていく。また、利用者一人一人の状況が異なるため、ケアの標準化は難しい。生活の場である施設においては、利用者ごとにその人にとっての最良の生活を維持することと、安全を確保することの両面に対応していく上で、難しさがある。同施設では、看護職である施設長が医療機関での経験を生かしつつ、介護施設の特徴を踏まえながら、多職種が専門性を発揮・連携し利用者・家族と共に安全確保に参画できるようマ

ネジメントを行っている。これにより、利用者本人の望む生活と最良の安全の実現に向けた支援を行うという各職員の意識が高まり、一丸となって安全確保に取り組むようになった。

全職員参加による安全管理体制の構築を推進

それまで各職種が情報収集しアセスメントしたことを職員間で共有し統合したサービスにつなぐ機会が少なかったため、話し合いの場を設けた。また、安全管理委員会では、安全確保についての年間目標と計画の立案、教育研修、職員へのインシデントレポートのフィードバックなどを行った。これによって、事故の再発防止策について全職員が提案をするなど、安全確保に関わるようになった。さらに、利用者が望む生活を状態やリスクを認識して実現するためには①倫理性②各職種の専門性③多職種連携の3つの視点が必要と考え、体制を整えていった。①の倫理性については、まず組織としての支援方針を検討する方法として、臨床倫理4分割法のシートを導入し、その人らしい生活と安全確保のバランスを検討し方向性を定めるようにした。家族との面談でも、利用者や家族の意見・気持ちを一緒に考え、シートに反映し整理できるようにした。②の各職種が専門性を発揮して利用者の安全確保につながるためには、各職種の視点で利用者を観察し、それらにアセスメント・統合した上で、チームとして利用者に接し、支援のプロセスと結果を理解していることが必要だった。そこで、業務日誌にアセスメント表を入れ、その日のリスクが高い利用者をリス

トアップし、職員で共有する仕組みを整えた。朝夕の引き継ぎミーティングでは、利用者の安全確保について多職種それぞれが意見を出し合い、日中・夜間の計画を立てた。さらに③の多職種連携を推進するため、多職種がお互いの専門性を認め合い、最良のケアを提供するために誰もが意見を述べるができる職場風土の醸成も図った。また、家族にも利用者の安全確保を意識してもらえるように、利用者に関する良いことも悪いことも含めた正確な情報提供を積極的に行った。

生活・暮らしと最良な安全の両立を共に目指す

これらの取り組みによって、情報共有の大切さを理解し、共通の方向性に向け多職種が連携して活動している。家族とも協働するようになり、同施設の強みにもなっている。施設長は「一人の責任には絶対にしたくない」という姿勢を貫くことで、職員の負担を軽減し、結果として職員を守り、施設内の信頼関係の構築につながった」と語る。「その人らしい生活・暮らしと最良な安全」の両立に向けて、今後も取り組みは続く。

※同施設の取り組みの詳細は、
本会 HP 参照



ミーティングの様子

